

読書

売れてる秘密

橋爪 大三郎

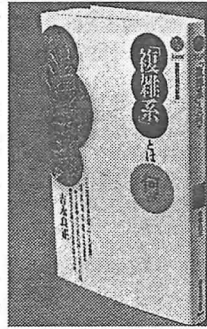
「複雑系」と聞いただけで、いかにも難解そうな感じがする。それをコンパクトに解説してくれるありがたい入門書が、本書だ。

著者吉永氏は、京大で数学、哲学を修めたサイエンスライター。「複雑系のほろへ」「花咲く複雑系の影に」と、ブルーストミみたいな目次で、本文も内容の割に平明だ。あまり予備知識のない読者も、複雑系とは何かについて、いちおうの見通しがえられる。

そこでさっそく、「複雑系」(コンプレックス・システム)とは何なのか? 比較的単純なたくさんの要素が絡み合ったもので、全体として、個々の要素から予想もつかないふるまいをするもの、と考えればい

『「複雑系」とは何か』

吉永 良正著



(講談社現代新書・249
円・660円)
96年11月20日発売。
5刷12万部。気になるキーワードの入門書。版元は「現代思想などにも影響を与えて、文系の学生も興味をもっている。」と話している。

「複雑」なテーマを平明に

いらしい。実際には、生物や脳、経済メカニズム、人工生命など、さまざまな現象がそれだという。

複雑系は複雑すぎて、これまで研究したくても、手元まで研究したくても、手段がなかった。しかし、カオス、散逸構造、フラクタルといった関連現象の研究が進むにつれ、コンピュータを使って、多くの要素を絡み合わせ、どんなふるまいをするか「実験」もできるようになった。複雑系を専門に研究する、サンタフェ研究所も設立された。複雑系を突破口に、専門の垣根を取り払い、二十世紀の新しい科学を立ち上げようと意気込む研究者が増え続けている。

というわけで、複雑系ブームなのだが、気がかりな点もある。研究方法は、①簡単な規則をいくつかコンピュターに放り込む②しばらく動かしてみる③何か面白い結果が出たら、それに似た自然現象を探す、の三段階。③は、著者も言うように、単なるアナロジーに過ぎない。理論らしい理論は特にないのだ。これが複雑系の科学の、強みであり、弱みでもある。

簡単な規則の組み合わせから複雑な現象が生まれる場合があるのはわかる。しかし、複雑な現象が必ず簡単な規則にもとづくとは限らない。複雑系は魅力的な考え方だが、科学者の描いた夢かもしれないと思っ

(社会学者)

読書

売れてる秘密

橋爪 大三郎

通名を名のり、日本社会に融(と)けこんで暮らし、隣人なのに視(み)えない韓国・朝鮮系(コリアン)の人びと。その真実の姿を、たねんに敬意をもって取材した、出色のノンフィクションである。

まずこの本で素晴らしいのは、さまざまな人生をまっとうしてきた在日の人びとの存在感。そして彼らのさりげないひと言もすっかり受けとめていく、著者の柔軟な感受性だ。

決して明るい題材ではない。差別があり、貧困があり、祖国の分断があった。一世、二世、三世はそれぞれの怒りや苦悩を抱えている。同じ在日でも、九州島出身の人びとに対する差別もある。けれども、読後感

『コリアン世界の旅』

野村 進著



(講談社・372円・本体1,748円)
1月初旬発売。初版は5千部と少なめだったが、2月に入ってから売れ行きが落ちず、現在7刷3万3千部。大宅壮一ノンフィクション賞受賞作。

在日の姿描く出色の一冊

はさわやかで新鮮だ。それは著者が、問題をタフに視るから告発するからだろうか。だたこれまでの見方に満足せず、できるかぎり相対的・普遍的な視点(あとがき)をとることに成功しているからである。

もうひとつ本書が優れているのは、構成である。I「コリアンとは誰か」では芸能界、焼き肉、民族教育、パチンコにかかわる在日の人びとの生き方を紹介。II「コリアン世界の旅」ではロサンゼルス、旧サイゴン、ソウル、九州島に取材し、日本のコリアン社会を地球大の文脈のなかに置き直す。III「コリアン終わりと始まり」では朝鮮総連など、在日の人びとの戦後の歩みを振り返る。あくまでも在日コリアン期待しよう。(社会学者)

の人びとに焦点をあてることで、日本社会の実態を別な角度から照らし出している。その結果、単なる在日の問題を越え、グローバルな人類社会の共存の問題を提起することになった。

文体も魅力的だ。抑制が利き、それでいて読者に熱く訴えかけてくる。足かけ三年にわたる取材の間、これほど知的興奮が持続した経験は滅多にない。著者は語るが、それは読者にも伝わってくる。コリアン世界の旅は、日本人が自分自身を知る旅でもある。なるべく多くの人が読んで欲しい。野村氏の今後大いに期待しよう。

1997年(平成9年)6月15日 日曜日

売れてる秘密

橋爪大三郎

精神病という心の病に、なぜひとと魅せられるのだろうか。自分でもさげすみ出すことのない心の奥底を、のぞいてみたいという好奇心だろう。それとも、見失いそうな自分を確かめる、鏡のようなものなのか。

『顔をなくした女』

大平 健著

患者と医師との真剣勝負

患者の病相は、まちまちだ。順調に成功しすぎて、理由のない不安に襲われたコピーライター。現実から逃げようとマンガを描いていくうちに、作中人物が乗り移ってしまった多重人格の女性。発病した息子のため、偽患者となって薬をもらいに来る初老の父親。切実に、健康人の想像もつかないが、そうやって患者の心



(岩波書店・247円・本体1,600円) 1月22日発売。4刷1万1千部。従来、岩波の本がよく出ると言われてきたが、この『顔をなくした女』は、著者の精神病理学への造詣が深い。

を想像してみると、交流の糸くちが見えてくる。本書は、おどろきような理論をふりかざさない。多重人格など流行のテーマも、あっさり扱って、そのかわり、言葉やふるまいによる患者と医師との真剣勝負である問診の場面を、あたかも一幕の演劇であるかのよう

朝日新聞 1997.8.31

97.8.31

売れてる秘密

橋爪大三郎

神戸の小六殺人事件。その猟奇的犯行に驚き、容疑者が十四歳の中学生と知ってまた驚いた。彼は病的で特異なケースなのか、それともごく普通の少年なのか? いったいいま子どもたちが何が起こしているのか? 親も教師も戸惑っている。神戸の事件のことは、河合雄雄氏の新著『子どもと悪』に出ている。事件より前に書かれたからだ。けれども、普通の子どもたちはみな「悪」を糧として成長していくという不変の真理を、本書はわかりやすく説明する。息子や娘のちょっとしたうそや盗みに驚き、このときは猟奇殺人でもしてかすのでは、と取り越し苦労をしたくなかったら、本書をひもといてほしい。

『子どもと悪』

河合 雄雄著

悪と絶縁し育てられない

河合流の臨床心理学は、まず相手をじっくり見て、理解しようとする。そのあと、具体的に解決策を語り始める。不登校、暴力、いじめ……。問題を解決してくれる、手軽な公式がない。ケースごとに相手と協力して、一歩ずつ進むのだ。忍耐と真剣さと、大人に言われてルールに従っているだけだった。だから子どもはなぜ、大人が悪大人になる過程で、しばしば「悪い」とわかっていてや



(岩波書店・227円・1,200円) 5月20日発売。6刷3万部。「今ここに生きる子ども」シリーズの巻。シリーズなかでも際だたて売れている。発売直後に、神戸の小六殺人事件が発覚した。

は「悪い」とわかっていてやっつけてしまおう。悪の魅力に取りつかれる。成長に必要なステップなのである。子どもを悪と絶縁し、善意のみで育てようとする親が、いちばん子どもをだめにすると河合氏は説く。善悪の基準をはっきり示すことは、もちろん大切だ。だが、それでも子どもは悪を犯すもの、天使でも何でもない。自立を強いて他人に依存しない子に育てようとするれば、薬物に依存する。親の関心が足りなければ、物を盗む。ひと筋縄ではいかない人間なのである。読みやすく収穫の多い好著である。(社会学者)

読書

売れてる秘密

橋爪大三郎

東京地検特捜部。ロッキード事件をはじめ、戦後をいろごる数々の政治家からみの汚職事件を手がけてきた敏腕検事たちの集団だ。元担当記者だった著者が、さらに調査を重ねて、そんな特捜部の全貌(せんぼろ)に迫る。

現役時代の取材を踏まえた本書の前半、田中元首相逮捕をピークとするロッキード捜査の部分が一気に読ませる。▲一生に一度でいいから、悪い政治家をこの手で捕まえたいといった正義感を胸に、エリート検事たちが寝食を忘れ、懸命な捜査を続ける。だが明るみに出せるのは、真相の多く一部にすぎなかったという無念……。こう書くと、特捜検察は



(岩波新書・222頁・640円)

9月22日発売、6刷74300部。リクルート事件などを取材した元共同通信の東京地検担当記者が、特捜検察の生い立ちから現在直面する問題まで、綿密に取材した。

『特捜検察』

魚住 昭著

正義の味方そのものだが、それは幻想であると著者は言う。▲国家中枢の腐敗を摘発する独立の捜査官であると同時に、国家を守る中央官僚群の一員という二面性を持つ、矛盾した存在なのだ。それは占領下、FBIを手にしつつも、妥協のなかで生まれた特捜検察の宿命である。保守党の腐敗をむやみに摘発して

政権を追い詰めることはタブーなのだ。

このような著者の指摘が正しいとすれば、特捜検察が巨悪を摘発できるのは、政治の追い風がある場合に限られよう。例えば、不可解な「偶然」から火のついたロッキード事件には、ワシントンの意向が働いたはずだ。本書は、組織の人間模様をよく描いているわり

宿命的に二面性はらむ存在

橋爪大三郎

売れてる秘密

97.10.12

「タイム」誌の北京特派員だったバースタイン氏らが、急速に台頭する中国への警戒をよびかけた書。表題の「闘い」はコンフリクト、すなわち単なる「紛争」の意味だが、台湾をめぐる米中の軍事衝突もあろうという、最悪のシナリオも含まれている。中国の将来については楽観論が多い。だが阿氏はあえて悲観論をとる。中国は九〇年代に方向転換し、アジアの覇権を求め始めた。阿氏は、中国要人ら多数を取材し、新聞雑誌を丹念に調べて、その結論する。ならば、米中対立は必至だ。本書の描く中国の戦略は明快だ。冷戦時代、ソ連と敵対した中国はアメリカと手を結び、日米安保を歓迎



(草思社・254頁・2,000円)

7月31日発売、7刷2万部。世界が注目する中国の動向を重ねてガイドラインへ関心の高い時期に出版したことも奏功した。

『やがて中国との闘いがはじまる』

R・バーンスタイン、R・H・マンロー

した。ソ連を包囲できて、日本の再軍備も防げるからだ。ところが最近、強大となった中国は、南シナ海に勢力をのばし、台湾への圧力を強めた。すると、駐留米軍や日米安保が邪魔になる。そこで戦争責任をむしろ、日本が軍事的に「普通の」国家にならないよう仕向けている。▲中国の目標は、アジアの卓越した強

国となること、アジアからアメリカの影響力を排除することなのだ。日本はどうすればいい？ 著者らの診断はこうだ。冷戦時代と反対に、これからは、強い中国／弱すぎる日本こそが問題。そこで日本はアメリカと協力して、駐留米軍を維持し、中国の核軍拡に反対し、台湾を防御する。この線で、中国と

の友好をはかるべきだろう。そして、日本自身が軍事を強化すべきだとも。先ごろ合意をみた日米安保の新ガイドラインは、本書が下敷きではないかと思うほど、基本認識がぴったり一致している。最近アメリカは、悲観論に傾いているのかもしれない。日本政府は、新ガイドラインは中国を敵視するものでないとし、加藤幹事長や橋本首相が説明に走り回った。アジアの将来を見通す長期的視点もなく、腰もすわっていない。本書をよく読んで、変動する国際情勢を頭に入れてもらう必要がありそうだ。(社会学者)

アジアの覇権求める中国像